令和３年度　第３回富山県農政審議会の概要

１　日　時　　令和４年２月14日（月）　10：00～11：40

２　場　所　　富山県民会館611号室

３　出席者　　委員18名、代理出席２名（委員数24名）

４　あいさつ（横田副知事）

今日は、前回の皆さんの意見を踏まえて、計画案をお示しする。

園芸振興については一段ギアを上げていく必要があり、新規就農者の確保については、地域の受入れ体制の整備や農地の継承と併せて進めていくことをメインにとりまとめている。持続可能な農業というのも大変大きなテーマであり、脱プラスチックや有機農業の振興も重要である。販売については、輸出に関して別途方針を策定するための議論をしている。

大変幅広いテーマになっているが、限られた時間で議論を深めて、これからの富山県の指針になるような農業・農村振興計画を取りまとめていただきたいと思う。

５　議　事

（１）審議事項

新たな「富山県農業・農村振興計画」の策定について

６　審議事項①についての委員の主な意見

【酒井会長】（※HPでは名前を削除）

・昔からの富山県の農業は、農地を集積して大規模化してきたわけだが、それでは農村がもたない状況が非常に強くなってきた。これからの担い手の在り方を考えていく必要がある。

農業・農村をめぐる情勢というのは大きく変わっており、１つは農村政策で多様な担い手、兼業農家だとか、半農半Ｘだとかも大事にするという考え方が非常に強くなっている。もう一つの流れとしては、環境政策で気候変動や生物多様性など、農業の質そのものが変わっていくことを要請されてきている。

今回は目標中間年の見直しだが、変更という意味では、富山県農業を基本的に根本から変える大きな変革の第一歩と言ってもいいと私は思っているので、この後、20年、30年先にどういう影響があるだろうかということもしっかり見据えて、率直に御意見をいただきたい。

【田中委員代理（前山）】

・南砺市では集落営農が多いが、集落営農の維持が非常に難しい。労働力不足、後継者不足というこ

とで厳しい状態になっている。集落内に入った新規就農者は自分の農地で園芸作物等をやって、集落営農の手伝いをするような形、また、集落営農から機械の提供を受けたりするなど、将来的には両方が協力し合うような関係をつくっていきたい。新規就農者の機械導入、特に最初の資金が非常に厳しいということもあるので、そういう環境を支援するような仕組みがあればいい。

・担い手集積率が令和13年度に80％ということで、今まで90％だったのを変えた理由を教えていただきたい。

→大規模な経営体の育成が進み、集積が進んでいる地域がある一方で、中山間地域や都市近郊地域では農業生産条件が不利ということもあり、なかなか集積が進みにくい状況がある。

　こうした状況を踏まえて、地域特性を加味した農地集積率の目標とし、平地農業地域は引き続き90％を目標とし。中山間農業地域や都市的地域は75％として進めていくということで、県全体としては目標として80％に設定するという考え方としている。

【寺井委員】

・方向性はおおむね良いが、この施策を進めていくためにも、支援策についてしっかりと知恵を絞っていくことがこれから必要である。予算編成をする時期で、いろいろ検討していると思うが、1億円産地づくりについても、充実強化する観点で検討していただきたい。

・方向性について、園芸振興あるいは新規就農者への支援で、県の普及指導活動が非常に重要な役割を果たしていると感じており、一層充実していくと書き加えていただきたい。

【永森委員】

・以前は安全・安心な農作物や、農業生産額の増大が中心だったが、この頃は災害や、生態系への配慮など、農業が持っている多様性の面も重要視されるようになってきた。そうすると、農家だけでなく、地域全体や、県民の方々が参加しないと目標が達成できない。市町村や県の役割が増えてくるので、そういったものも指標として取り入れたらどうか。

【鍋嶋委員】

・新規就農者の数は大きく伸びていないが、農業未来カレッジの今年の学生さんが19人ほどと今までになく大きく伸びている。富山大学には農場があって、田んぼがあって、トラクターからコンバイン、乾燥機まで備えており、カレッジの生徒さんたちや新規就農者と何かコラボできればと思う。

→【会長】大学の農場は旧教育学部系だと思うが、農業者を育てているのではない。大学での農業教育は、私も大学を離れて、教える人がいなくなってしまった。いろいろな機関、他の大学もあ

るので、連携を取ることも大きな課題となる。

・基盤整備については、1970年代ぐらいに行われたときのスピード感で、汎用化を早く進めていただきたい。

→昭和40年代、50年代では、区画整理を重点的に進めてきた。基本的には農家負担があったが要望が多かった。今、整備をするには、農家負担を求めることがかなり難しい。農地中間管理機構などの力も借りながら、地域の合意形成を進め、農家の方に費用負担をできるだけ求めない形で進めている。

【稗苗（史）委員】

・中山間の維持には直払いの交付金が大切であるが、うまく使える人が地域にいない状態だと思っている。中山間の農業は問題が山積みで、地域の人はもう諦めていたり、行政が何とかしてくれると思っていたり、やる気のある担い手とすれ違いが大きくなるので、その橋渡しをしてくれるような中山間の担当者などの人材育成に力を入れてほしい。

【松澤委員】

・販路拡大の数値目標が、オンライン商談による年間成約件数を現状の３件から50件にするとは、かなりの努力が必要である。それをクリアするには農業者さんの支援をすることが必要になる。点よりも面的なプロモーションが必要である。

「幸のこわけ」「べつばら富山」「富のおもちかえり」の中に、農業者さんが生産されたものがどれだけあるのか。農業者さんたちの商品がそのレベルに入っていないのかもしれないが、そうだとしたら、何が欠けていて何が課題であるのか。味なのか、価格なのか、量なのか、見せ方なのかというところを分析して、農業者さんにフィードバックする取組みが必要である。

・販路拡大の取組みについて、マーケットインの視点も日々変わるので、そういった情報提供を適宜行っていく仕組みがあると、さらにこの目標値に近づけると思う。

【森下委員】

・将来的にコシヒカリに替わる中生の主力品種として富富富を拡大させるとなっているが、コシヒカリを食べたいというお客さんがまだとても多い中で、令和13年度までにはどこまで拡大することを考えているのか。

→富富富については、温暖化も進む中で、将来的にはコシヒカリに替えて中生の大宗を占める品種を目指している。面積については、令和７年に2,000ヘクタールを目指していくこととしてお

り、その後については、消費者、実需者の方に評価をされ、需要を確保しながら生産拡大を図っていくこととしている。

・先週行われた新規就農者の表彰の名簿を見ていても、農業未来カレッジからの就農者の割合が多い。離農されないためにも、担い手の集積を高めるためにも、魅力ある所得向上に向けての指導や支援はこの先も続けていかないと駄目であると思う。

【安井委員】

・卸売市場は、地域の生産と地域の実需をどうつなげていくかという役割があり、そこが旧態依然とした形の中では機能不全となる。例えば、地元の大手某量販店の産直コーナーに農業総合研究所の「農家の直売所」というビジネスモデルを組み込もうという話を進めており、洗練された産直コーナーの技術を導入していこうとしている。

・産官学連携で、富山大学と「青果塾」というものに取り組んでおり、学校給食会の栄養士さんと農家さんの触れ合いの場をつくったり、量販店さんのバイヤーと地域の農家さんがいろいろ意見交換したりという場をつくっているので、連携を取るような取組をどんどん増やしていただければと思っている。

【青木委員】

・農林水産省では、2022年度で麦、大豆、野菜など、生産性や収益性の高い作物への転換を促している。飼料用米を支えてきた複数年の契約や転作拡大への助成を見直す一方で、主食用米の需給安定のため大幅な作付転換が必要となっている。

　大麦の作付はＲ２年、Ｒ３年と年々増えているが、大豆はＲ２年、Ｒ３年と横ばいになっているのはどうしてか。

【石田委員】

・移住して農業をしたい、球根をしたいという相談があり話を聞くと、キクラゲの工場をしながら、チューリップを作りたいという話であった。今後、そういう移住者が増えてくると思うので、新規就農者の受け口を分かりやすくして、住居の状況などわかるようなパンフレットとかを作ってあれば、いろんな相談に乗れると思う。

・作物を作るときに、県にもいろいろ指導機関があるが、チューリップなど地域性があるものに関しては経験者でないと教えられない部分もあるので、指導者の育成に対しての支援も考えていただきたい。

・田んぼダムで排水枡に板を設置したが、既に朽ち果ててしまって機能していない。それに対する

後のケアがないと最終的にはあまり機能しないのではないか。

【伊藤委員】

・高品質な米生産とあるが、高品質は当たり前で。推進施策に「選ばれる米づくり」という言葉があり、この表現のほうが良いという感じがする。

・園芸振興では、富山ならではのものについて試験研究を加速化するというのは大歓迎である。ただ、温暖化で、雪国というイメージは富山県民の誰も持っていないと思うので、「雪国の特長を活かして」という言葉は引っかかる。

・高品質な選ばれる米づくりでは、有機農業も当然出口になる。富山はいろんなおいしい米を作っているが、有機の里などの取組み、特徴的なものを表に出しても面白いと思う。

・新規就農者を増やしていくという話だが、これはプラスの話である。経営継承をされている方はいっぱいいるが見えないもので、これが果たして多いのか少ないのか。何か関係を示す資料があれば一度お示し願いたい。

・最終的には人の力であり、「人・農地プラン」の法制化もされた。地域で一体となって10年、20年、もっと先の話をするというのが一番基本じゃないかと思う。

【岩元委員】

・昨年５月に策定された「みどりの食料システム戦略」について、国際的にＥＳＧ投資、脱炭素が言われている状況の中で、農業もそういうことに取り組むべきではないかと思う。農業の生産力の向上だけじゃなく、持続性との両立が大きく挙げられている。

　全国の情勢変化の中で触れられており、第３章の推進施策の中でも、人と環境にやさしい農業の普及という項目であるが、脱プラスチックや、有機農業を取り上げられているので問題ないが、可能ならばもう少し踏み込んで、富山らしい書き方をしたらどうか。

【大西委員】

・食育については学校教育ということで触れてはあるが、農育とか食農育について触れたらどうか。

・小中学校も児童生徒が少なくなっている中、再編が進んで、小学校がない農村コミュニティーがどんどん増えて、拠点がなくなっていく状況がある。事務局から農村ＲＭＯについての説明で、中山間地域サポートセンターさんがやっていると聞いたが、そういう観点も持てればいいと思う。

【尾畑委員】

・安全・安心な作物、今で言うＳＤＧｓとか、エシカルと言われるようなものが成り立つような生産

者をぜひ応援したいと思っているので、今回のこの計画については、いろんな意見を取り入れ、うまく取りまとめられている。

これからの農業は環境が非常に大きいということで、富山県は環境先進県、それから、ＩＣＴなんかも比較的進んでいる。そういった技術を融合させて、横のつながりをうまく有機化して農業政策に生かしてもらいたい。ただ、目標値については、前回立てたときと大分ダウンしている。下げたことで甘んじることなく、先を見据えて、高い目標を持って続けてもらいたい。

【川合委員】

・食の富山ブランドについては、富山県の加工業者は中小規模が多く、価格競争の厳しいところは大手食品産業に押されてしまうので、付加価値の高い商品の販路開拓が重要である。有機の里、有機農産物というものをしっかりとしていってほしい。富山のすばらしい環境の中で生まれてくる農産物であり、それを加工した食品というものが、もう少しブランドという面で、新しい展開していけたらと思う。

【笹島委員代理（長島）】

・この先の行政のビジョンあるいは計画を考えるに当たって、なかなか明るいものが描きづらいというのが現状である。昨今の米価の下落、燃料の高騰、資機材の高騰などで、しっかりした担い手でも相当なダメージがある。新規就農になると、入善高校に農業科があるが、卒業生がほとんど就農しない。農家がもうかるような仕組みをつくっていかないと、今後、農村環境なり農政というのが成り立たないのではないかということで、県ぐるみでもうかる仕組みが描けたらなと思う。

・担い手さんに農地を預けている方の農地の所有意識が薄れていく状況が徐々に出始めている。なかなか農村環境整備に参加していただけないということで、多面的機能が維持できない組織もぽつぽつ出始めている。今後、良好な農村環境を維持していくために、そういった仕組みづくりも必要である。

・水田の軽微な改良などをすれば十分転作しやすい水田もあるので、支援等があればありがたい。

【島澤委員】

・多様な若い就農者が入ってきたが、離農する若手農業者も確実に増えている。リーダーシップを取れる青年農業者の育成をしていってほしい。

・10年後、20年後の富山県の農業を見たときに、やはりお米の生産が主体となってくると思う。水資源が非常に豊富で一番やりやすい農業だと思っている。中山間地は水資源が乏しいので園芸などを導入していきやすい環境づくりが大切だと思う。

・多様な農業生産が増えてきて、有機栽培や園芸栽培などで、農薬散布のドリフトが問題となる。園芸の防除をしているときに収穫間近の稲作があるのでは、安全・安心な食料を提供できているのか疑問なので、すみ分けのための話合いが必要でないか。

【新村委員】

・養豚の場合は、おととしまでは売上げに対して大体５５％が飼料代だったが、今現在は７５％ということで、電気代と人件費といろいろ払うと、利益が出ない状況。ただ、飼料米については運賃が非常に安く私たちの手元に入るということで、大体４５％飼料に混ぜて使っている。

・ＣＳＦ、豚熱については、野生イノシシに入ったので浄化が非常に難しいということで、清浄化するには少なくとも１０年は最低かかるかなと思っている。非常に厳しいリスク管理の中で、１％にも満たない０.何％が発症したとしても全頭殺処分ということで、全頭埋却ということになっている。東大阪と相模原で発症した部分については、レンダリングマシンを使って、その後、焼却処分という形を取っていただいたので、地下水汚染だけは絶対避けたいので、富山県の場合はレンダリングマシンを使いたいという形でお願いしたい。

【横田副知事】

計画を策定して終わりではなく、これをいかに現場側に伝えて、現場の人たちに動いてもらって、この農業をめぐる状況が変わっていくということが重要である。

農業産出額は年々下がっているが、これを逆転させて上げていくということが今回の計画の目標であるので、これからも皆さんと一緒に手を携えて、富山県の農業・農村の振興に県尽力していきたい。

【会長】

・富山県は環境先進県という売りなので、有機の里、環境保全型農業など、環境への配慮について計画に盛り込む。「みどりの食料システム戦略」は、安全・安心ではなく、環境問題、脱炭素、生物多様性が中心となっており、有機農業や脱プラスチック化などの記載はあるので、生物多様性についても記載する。

・新規就農は受け皿が必要であり、他県と比較して特徴を出せるか？選んでもらえるか？見せ方が重要である。カレッジについては、いろいろな機関との連携が必要であり、既存の農業者についても、リーダーシップをとれる農業者を育成するため、ステップアップを進めるような研修も必要ではないか。

・多様な担い手は、所得の確保が必要である。入善高校の卒業生がほとんど就農しないことや、離農者がいることは、儲かって生活できるような仕組みを示されていないからではないか。どのよう

な品目を組み合わせて所得を確保するのか示していくことも検討する必要がある。